

山田流の流祖を探ぐる

山田 初尾

一、朝比奈角右衛門正次と山田流

この記事は西南郷小史をはじめ、小笠郡誌、小笠郡勢要覽、嶽南史(第五番)、掛川誌稿、掛川史誌、高天神城戦史などにみられる。ここでは今だあきらかにされていない山田流の流祖をさぐる。

西南郷小史には劍客朝比奈角右衛門、寛永年間の人なり正次と據す剣道に秀て里人を教へ導て武道を励ませり、正保二年七月十一日没す。兵雄明法居士と諡し小塚に葬る。

さらに西南郷小史のなかで、小塚について、南西郷字池ノ谷千二百二十九番の地に在り朝比奈角右衛門正次の墓なり、正次は寛永年間の人にして剣道を能くし、其先は伊勢の国多下郷大上国主より出づ山田ヶ谷に住して山田流と号する其の頃掛川城主就いて其術を学びたるにより其の田地十六石を半免に為したりと言う。又、朝比奈姓は其遠祖が朝比奈備中守より賜はりしと言ふ。

さて、山田流の遠祖を探ぐる。山田流は勢州多下御所大上国主より出ずと記されている。勢州とは伊勢の国、多下郷とは、多気、多芸、このほか多下、多解とも書くことがある。いわゆる現在の三重県一志郡美杉村多気のことである。

多下城(多気城)とは、伊勢国司の居城であって、本城名は霧山城である。多下城は地名をとっているもので、城は天険の多気に置かれている。城のことは後記する。

二、多気に触れた記事をさぐる。
多気に触れた記事は多くない。

○ 応仁三年(一四六七) 十月足利義親が国司を頼って下ってきた様子は「十月の初め、帝都を御出、伊勢国司館生の山家の入申、寂寛の閑居、御本懐をおぼえたり」とある。「応仁略記下」ただしこの生の山というのが多気のことを指すのかどうかは分らない。

○ 文明十六年(一四八四) 四月將軍の伊勢参宮のさい多気に立寄ったことがあった。「上様御参宮御宿之事相替前々可為如形云々、就其国司館二四、五日可有御座之由被仰下」とあるのがそれである「大乘院寺社雜事記」

○ 文明十六年四月六日 また、「明中西道今在多気国司之館云々」ともある。「蔗軒目録」

○ 明応八年(一四九九)と永正三年(一五〇六)には多気館の焼失、回録も伝えられる。

○ 大永二年(一五二二) 七月連歌師宗硯は奈良から伊勢国に赴き途中に多気を訪れている。

その経過を「夜になって多芸へ行つきぬかれへは管領の御文あればつけ侍りぬ。又のあした北畠の少将家に参る御対面ありそれよりいそぎたちて相可といふ所に行ぬ」と述べている。「さのわたり」同じ時に宗長は宗硯に逢い面吟千句の法楽をし、山田などへ行つたが十月になって多気で二、三日逗留し、ついでに泊瀬に向つた。

○ 永禄元年(一五五八) 八月山科言繼は伊勢国へ旅立ち飛鳥左近吾の書状を多気へ言付けている。その時の様子を「至多氣以上山路也申刻国司雜色次木新右衛門宿ニ着了」と言っている「言繼卿記」

○ 永禄元年八月十三日、いずれも多気という字句だけが記事があっても寂寛とか山路なかの言葉のみでそこから受ける印象としては、辺鄙な山間の所を予想される。

○ 多気城の東麓には北畠氏の館が存在する館を中心として、その前に並ぶ武士屋敷とか寺社などの景観は天保十二年(一八

四一)の著である齊藤正謙の『伊勢国記略』には次のように記されている。

○多芸御所より半町許西北に禁中宮あり(今按ずるに下多芸に居す、後醍醐、後村上兩帝を奉祀す。此迄ハ右の城中なり、今祭礼ある由なり)

又、一町許南の間大宮を初め諸士屋敷跡、あまたあり。

又、十町余北に秋山、朴木等の屋敷跡あり。皆々畑になり。

又、五町東に芝山、奥山、藤方の屋敷跡あり。但、藤方屋敷は国司落居の後、信長公の下知にて土方伊兵衛五、六年住す。今は畑になれとも堀の形もあり、半町四方の屋敷なり。

又、五町北西に当て下り、松八幡の宮あり。五、六町東北に八王子の宮、蔵王権現の宮あり。

又、十二町西北に元弘年中建立の加納大明神あり。北畠代々の氏神也。

又、北野天神の宮稻荷山あり。

又、十五町西に若宮八幡の社あり。

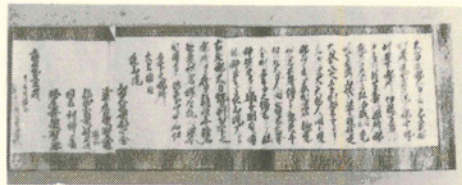
又、廿二、三町北に若宮天王あり。

又、一里半西にあたりて、山王の宮あり。其外寺敷は所々数多し、御所の城山七間に五間ほど続く。西山に遠見附城あり。

鐘樓堂の跡もあり。大和国の見附城の跡剣か峯の上にあり。御所の南方なり。御所より北にある大山は経の峯といふ。御所の鬼門にあたる故一字一石に大乗妙典を彫付け納る塚也右の外所々の高山にのろし場たる場所あり。

又、霧山城の跡比津村にあり。

東西四十間程、南北三十間程中に堀切あり。



御所の見付城といひ伝へり、(今按ずるに天正九年九月清州沙汰役人船木齊藤の改めた多芸寺社家中屋敷附によると、すべて大名休に寺社共に二百六十軒、小身二百四十余人也)(長屋税度)

二、城下の武士の数

城館地を形成する主な階層は武士である。北畠氏の家臣は、永禄八年十月の日付けになる「伊勢国司多氣御所北畠家臣大概写」には一〇五三名。

・天正二年(一五七四)三月「勢州多氣御所」には六七五名。

・天正十年(一五八二)の「北畠氏家臣帳」には七二〇名。

・年次不明で安永二年(一七七三)十月に写した「伊勢国司御一族諸侍社記」には、一族十七、諸侍八五一名がみえている。

大凡七百名から千名ぐらいが多氣にいる。

・勢州軍記には国司の軍勢は侍九千人うち、馬上千五百騎、小人六千人、合わせて一万五千人と記してあるから多氣に居住する武士は全体の十五分の一ないし、二十分の一ほどとなる。

三、霧山城の概要

霧山城(多氣城) 下多氣字宇上村

地目 山林 立地 山地 規模 一五〇×二七〇米

時代 興国 城主 北畠氏

備考 昭和十一年九月三日 国史跡、名勝

下多氣の標高六〇〇米にある、北畠氏の本城で興国三年(一三四二)顯能が設けたものである。この地は初瀬街道に沿ひ吉野へ六五軒、神宮へ四〇軒の地にあり、館から麓の屋根づたいに登れる天險の地である。そして天ヶ岳の砦に警鐘を置き、丹生俣に通ずる杉峠や赤穂に通ずる嶺路越口に砦、上仁柿に通ずる櫃坂峠に関所、小川に通ずる白口峠口下ノ川に通ずる桜峠口八知に通ずる比津峠口に監所をそれぞれ置き、城の外郭とした。本城には米倉、鐘樓堂や道堺が配置され、城切と土塁で防備

されていた。

天正四年（一五七六） 具教（八世）が三瀬谷で殺されるや大軍が白口峠、桜峠から突破し、多気の城下を焼き払い霧山城に登り押し寄せた。

城代北畠政成はよく防いだが衆寡敵せず城を枕に討死し、廃城となった。城は南北が急斜面となり東西の尾根に堀切、土塁などそのまま当時の面影を残している。

霧山城はいわば詰の城にあたるもので、平生の館は現在の北畠神社のところに北畠氏館（多気御所）にあったと言われている。

四、北畠氏館の概要

北畠氏館（多気御所） 下多気宇耕作

地目 社境内 立地 台地

規模 時代 城主 北畠氏

備考 昭和十一年九月三日 国指定文化財、史跡名勝

概要 多気神社の境内一帯で興国三年（一三四二）北畠顯能が多気に入り、二代顯泰、三代満雅、四代教具、五代政郷六代材親、七代晴具、八代具教、九代信意（具房）の府城で「多気御所」と呼んでいた。

五、北畠具教郷と一の太刀

塚原ト伝屋敷跡 下之川塚原

劍聖と称える塚原ト伝は常陸国（茨木県）の古い家柄に生れ、生涯を武芸の修行についやし、全国各地に門弟指導のための道場をもっていた。ト伝が第二回の修行に出た、大永二年（一五二二）さらに第三回弘治二年（一五五六）には、しばらく伊勢にとどまり、北畠具教公に唯一人という（一の太刀）を授けたといわれ、その当時住んでいたのが、この屋敷だと伝えられている。現在、杉山になっているが戸井戸が残っている。

以上、山田流の遠祖ともおもわれる勢州多気御所の史実をさぐることができたものの、山田久兵衛尉宗金、朝比奈角右衛門尉正以外の人物の手がかりがつかめない。また、山田流が遠州現、掛川市南西郷（小字久保）の山田ヶ谷に住したか歴史的流れを探ぐらないと解明にはならない。

山田流の流祖が何派に属すのか、つかめない。山田流の由来書の中に弘治二年とある年は、塚原ト伝が勢州に住し、指導にあたっていた時代にあたる。いささか間違はないものか、武芸派事典の編者、綿谷雪氏、山田忠史氏に紹介し指導を仰ぐも綿谷氏は逝去、山田忠史氏よりの便りでは、山田流は時代からして、塚原ト伝流（新当流）を北畠具教郷が一の太刀を受けついでいる故にこの流れをくんでいるのではないか。山田流は筆頭者が、山田久兵衛尉宗金であることから流祖とみてよいのではないかと教示をうけている。しかし、今後さらに究明してゆくつもりである。



（朝比奈角右衛門の墓）